

アカデミーホール山口

前田哲男

Academy Hall in Yamaguchi

Tetsuo MAEDA

1. はじめに

全国各地で大学と地域との関係のあり方が問われている。山口県央部では平成5年に第1回山口学園都市フォーラムが、「まちが大学・大学がまち」をテーマに開催された。大学と地域との連携を深めるための活動はその後も継続され、様々な事業が展開されている。さらに、平成16年10月には第1回「まち」＝「大学」全国サミットが開催され、2日目の分科会の中で、第1分科会のテーマとして「まちが大学・大学がまち」が再度、採用されている。

この活動においては、大学と企業との連携を深めるということ以上に、地域住民の生活の質的向上を目指して、いつでも・どこでも・誰でも・大いに学べるという生涯学習に対する関心が強い。「まちが大学・大学がまち」ということは、大学が地域に開かれていくとともに、地域全体が大学のキャンパスになっていくことである。大学教員・学生・県民がまちのいたるところで研究・学習・ワークショップ等を実施し、生きることは学ぶこと、学ぶことは生きることの県民生活を構築する。自己をつねに磨いている人々が、自分達の研究や学習の成果を用いて、地域や人々のために活動していく。こうした県民活動の活発な地域社会の実現を目指している。

この施設計画は、「人と文化・芸術と自然の出会い街」という空間構成イメージのもとに、県民による生涯学習活動の拠点を提供するものである。

2. 敷地

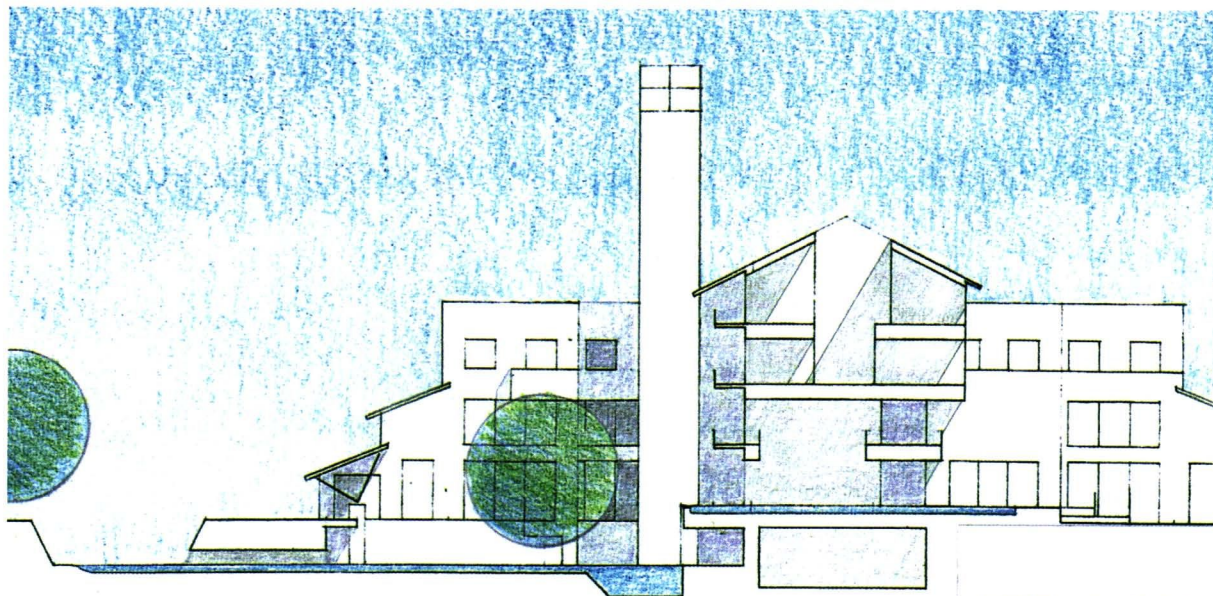
県都でありながらも山口市は、自然が豊かであり、市内に流れる一の坂川は、ホテルと桜で有名である。

しかし、中心商店街に平行して流れている部分は3面コンクリート護岸の味気のない景観であり、中心商店街の近くにありながら、十分に活かされているとは言えない。一の坂川と中心商店街に挟まれた米屋町の一画（中心商店街に面する既存の商店はそのまま残している）を施設用地として提案しており、この米屋町北街区の修復型再開発は、商店街に回遊性を与えるものと考えている。

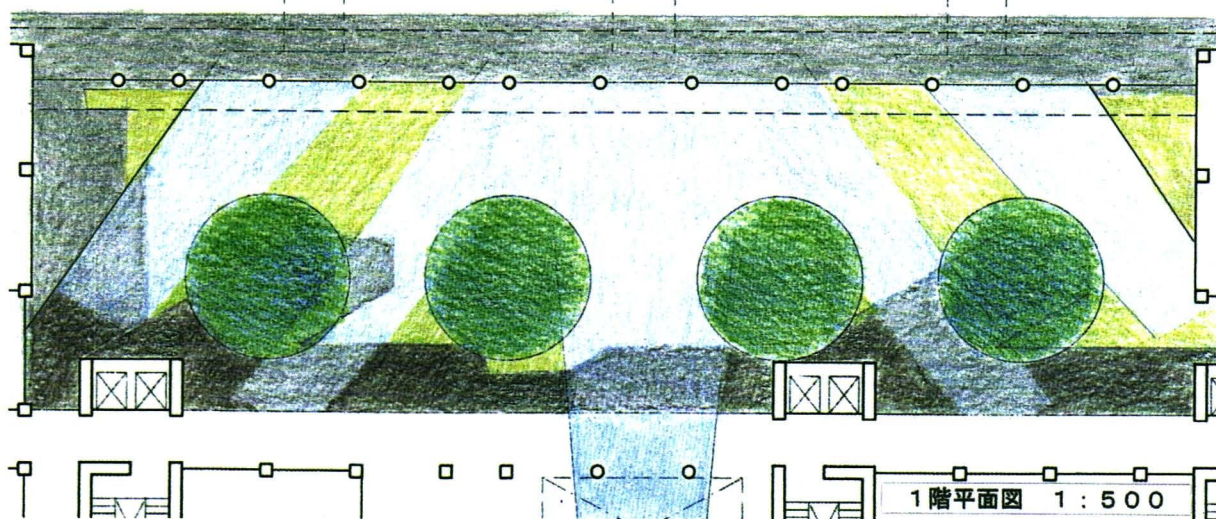
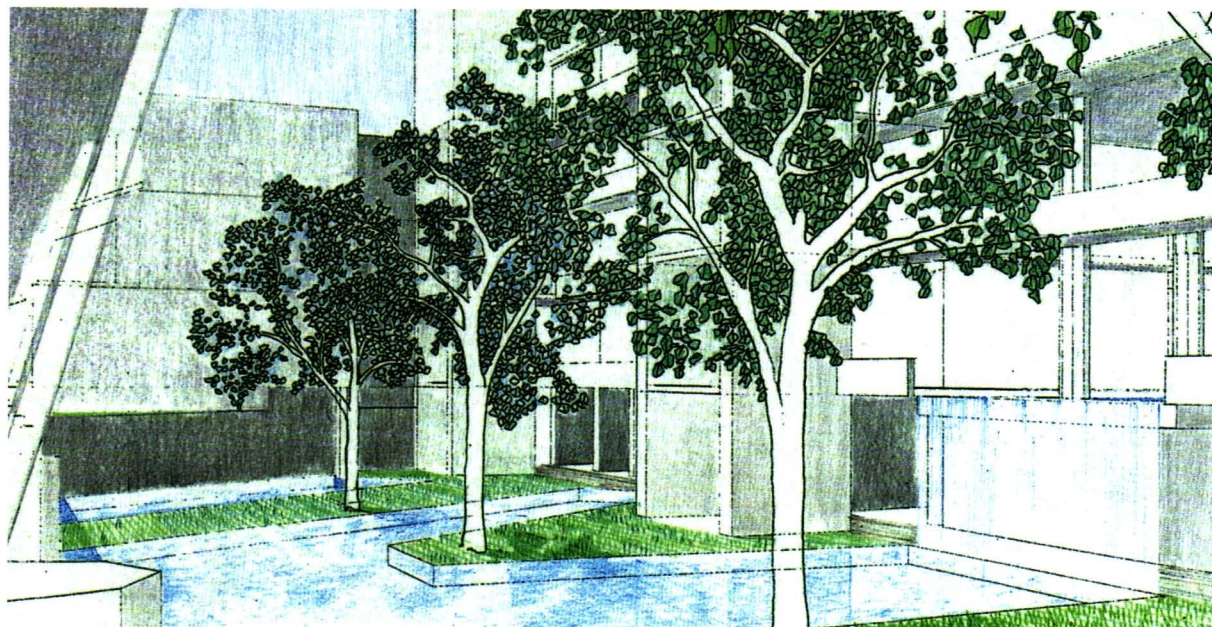
3. 施設構成

自然の大いなる営みに目を向けることは、日常に埋没せずに視野を広げることに繋がる。自然を研究するあるいは観賞するといった、自然と共生した生活スタイルが一般化するように、一の坂川の水を引き込んで、自然観察の可能な浸水公園を提案している。これは地下1階レベルにあり、水門によって水量を調節すると共に、滝と滝の水音を都市空間に提供している。

建物は、この浸水公園をコの字に取り囲むように配置し、垂直動線としてのエレベータを浸水公園側に設置している。エレベータの入っている3本の塔が、都市のランドマークとして、施設での活動の意義を象徴している。地下1階と地上階には、商業施設を配置し、2階にこの生涯学習活動のための拠点機能を配置している。なお、建物の一部は、4階になっているが、ドーナツ化現象に対して中心部の人口増を図るために、住居を併設し、多様な機能による複合施設として提案している。



断面図 1 : 500



1階平面図 1 : 500